

卷 頭 言

大阪府立盲学校

校長 関 喜 昭 史

1981年(昭和56年)「完全参加と平等」をテーマとした国際障害者年に、クルト・ワルトハイム国連事務総長が「国際障害者年の指定は、国際社会が単に同情や慈善心からだけでなく、社会正義に基づいて障害者の福祉のために尽くすことの決意を示すものである。障害を持つ人々は彼等の人権について全面的に尊重される資格がある。彼等は社会を構成する対等な一員として機能することを認められなければならない……。」と声明してから、はや10年の歳月が経過しました。

この間、我国においては、国はもとより各都道府県及び市町村においてもこの声明の精神を踏まえ、障害を持つ人々が社会の一員として社会、経済、文化等の分野で積極的に活動するとともに、現代社会の各般にわたる生活を等しく営むことができるようにするための施策を講じ、国民の理解と協力を得ながらその実現に努力されてきたのです。

行政に携わる方々やそれを支える多くの方々、更に障害者自身も力を合わせて、初期の目的の達成を目指し、乗り越えねばならない幾つかの大きな壁を1つ1つ乗り越える努力を重ねてきました。その成果については、それぞれの立場でいろいろな見方があります。しかし、結果的には障害者を取り巻く諸状況は、足らざるところまだまだ多いとはいえ、概してより確かに、より良い方向に変化しつつあることも事実であり、一定の評価を得るところであります。

しかし、こうした中であって今後更に充実した障害者の施策を進めるに際しては、今尚、乗り越えねばならない最も基本的でしかも最も困難な壁があります。それは、国際障害者年の目指す基本的な課題であるところの「障害者に対する正しい理解と認識」の壁なのです。

世の中の諸事には、冷厳な事実として「する側とされる側」があります。とりわけ理解ということについては、「如何に理解するか」「如何に理解されるか」というそれぞれ理解する側とされる側に分かれた尤もらしい論理があります。そ

してその論理は、寄って立つ立場にのみ立って展開する限り、大方の場合相容れることはありません。そこには相互に正しい理解は望めないのです。

過日、学校から帰るときのことでした。校門を出た時、10m程先を年配の生徒Aさんが白杖をつきながら、おぼつかない足取りで歩いていました。彼はいわゆる中途失明者です。やがて彼が商店の前に差しかけたとき、私は店の前の点字ブロックの上に自転車が置いてあるのに気が付きました。「Aさん危ない！」と声を掛けて走りましたが、残念ながら間に合いませんでした。彼は自転車と共にもろに倒れ込んでしまいました。自転車の持ち主が慌てて飛び出してきました。私は無性に腹立たしく、きつく注意しようと思いました。その時彼は「すみません、自転車は壊れていませんか」と言ったのです。壊れていないことを確認し、再度あやまった彼は、打ったところをさすりながら先生行きましょと歩き出しました。そして、「私は盲学校に来るまで、ある店で働いていました。自転車に乗ってよく外回りをしていました。しかし、その時は点字ブロックや盲人のことなど思ったこともなく、自転車なども置きっ放しでした。そんな私が今、失明したからといって、あの人を非難できるでしょうか。むしろあの人は、これから私たちのことを気に掛けてくれるのではないかと思います」と淡々と話したのです。私は理解される側の心を教えられ、心が洗われるような感動を覚えました。

理解される側に立つことは辛いことです。視覚障害者にとって最も辛く悲しいことは、この世の中の事ごとが全て見える世界にあって、見えない世界にある自分たちが好むと好まざるとにかかわらず、この見える世界に生きねばならないことなのです。絶対に見ることの出来ない立場にあって、常に見られ続けられることが辛い。それを素直に分かって欲しいと思うのです。

視覚に障害を持つ生徒たちが見える世界に生きていく為には、自らの力で生きる手だてを学び、自らを厳しく律する強靱な精神を養うことが大切と考えます。しかし、こうしたことは私自身、課せられたとしてもなかなか為し得ることではありません。それを視覚に障害を持つがゆえに敢えて望まざるを得ないことに心が痛みます。人間が人間を理解するためには、人間としての暖かい心と人間性豊かな英知が必要と思うのです。